

5月5日は日本の歴史にとって新たな頁を開く記念日となるかもしれない。1970年に若狭湾から大阪万博会場に初めて商業用原発の電気が送られて以来、42年間にわたって日本人は原発に頼って生きてきた。原子力村の科学者やそれに便乗した無知な政治家たちに無理やり原発依存症にさせられてきた、と云った方が正確だ。今、多くの政治家たちも表向きは脱原発依存、と唱えざるを得ない状況になった。しかし、それは福島の被災者たちの多大な犠牲の結果である。原発の再稼動を許してはならない。再稼動を唱える人々は、福島、そしてチェルノブイリの人々への想像力に欠けた人々である。この夏、原発なしで乗り切ろう。それが脱原発への第一歩である。

もんじゅ廃止、それが脱原発の始まり

既に何度も書いてきたことだが、脱原発の始まりは「核燃料サイクル幻想」を断ち切るしかない。原発が始まって以来42年、原子力村の科学者達は、資源小国の日本は燃えないウラン(238)を燃えるプルトニウム(239)に転換出来る高速増殖炉が必要だ、と主張してきた。それが出来れば核燃料資源は今の100倍になるというのである。それは彼等にとっても夢であった。しかし既に20年以上も前に高速増殖炉でプルトニウムが増えないことは明らかだった。プルトニウム増殖時間が100年以上かかることが明らかになったからである。技術的に短縮は可能だが、それには炉心の密度を限りなく核兵器に近づける必要があり、危険性もまた明らかである。アメリカを始め欧米各国が早々と核燃料サイクル幻想から撤退したにはそれなりの理由があった。しかし、日本の科学者たちは違った。彼等はもんじゅが稼動しようとしまいと、存在すればそれで良かったのである。もんじゅはナトリウム火災を起こした1995年以来、17年間殆ど止まったままである。にも関わらず維持費は一日当たり5900万円もかかる。年間210億円である。冷却剤のナトリウムが固まらないように200℃を維持するために、他の発電所からの大量の電気(2万4千世帯分相当)を使い、人件費、管理費など維持費も必要である。それは夢の実現のための必要経費という名目であった。実際はこうした費用は全て原子力村の住民達の懐に入る。もう、夢から醒めなければならぬ。もんじゅが止まれば必然的に青森県の六ヶ所村再処理工場も不要になる。再処理工場は使用済み燃料からプルトニウムを分離し、もんじゅの燃料を作る、というのが目的だからである。アメリカはカーター大統領時代に高速増殖炉を諦めて以来再処理工場も全て解体した(兵器用は除く)。5月23日、文科省はもんじゅ廃炉も含めた核燃料サイクルの見直しに着手した、と伝えられた。原発依存症患者たちが早く目覚めることを期待したい。

脱原発は廃炉時代の始まり

原発を運転すれば放射性廃棄物が出る。これも原発運転開始以来の課題だった。原子力村の専門家達は、この問題についても「いずれ何とかなる」と主張してきた。しかし、既に明らかのように、未だに解決策は

ない。核燃料再処理で出来る高レベル廃棄物は、いずれ国内のどこかの地下深く埋設し、レベルが自然放射能に近くなるまで10万年間安全に保管できる、と彼等は主張してきた。これを信ずる人は誰もいない。最大の問題は原子力村住民達の時間感覚の麻痺である。もんじゅにせよ廃棄物にせよ、いずれ何とかなる、という主張で他人だけでなく自らをも騙してきた。放射能は人間の力では処理できず物理的半減期による消滅を待つしかない、これは誰にも否定しようのない科学的事実である。原発を運転すればするほどそれが増える事は素人にも分かる。しかし、政府も専門家も廃棄物問題の解決をこれまで先送りし、原発増設に邁進してきた。福島原発事故は、いずれやってくる廃炉時代の放射性廃棄物問題の深刻さを、事故という形で私たちに見せつけたのである。汚染瓦礫問題は今全国を揺るがしている。政府は、廃炉に伴って出る大量のスリ切り廃棄物(クリアランスレベル)の処理方針を福島事故前の2010年11月に決めていた。放射性セシウムは100Bq/Kg以下ならば、ただのゴミとして埋め立てたり、リサイクルしたりしても良いことになった。しかし、福島事故で状況は一変した。8000Bq/Kg以下は、ゴミ処分場に処分し、将来その上に家を建てたり、農業を行なってもかまわない、とする指針を発表し、それを根拠に全国自治体に汚染瓦礫の処分協力を迫っているのである。これまで先送りしてきた廃棄物問題を放射能の全国拡散という方式で解決しようとしている。福島県内の瓦礫や汚染土壌は、とりえず中間貯蔵し、いずれ県外で処分などと云っているが、これも問題の先送りではない。最終処分こそが国民の関心であり、未来がどうなるかの判断材料である。

放射能は拡散してはならない

これが放射能から身の安全を守るための基本である。政府はこれまで先送りしてきた原発廃棄物問題を、瓦礫処理問題にすりかえ、廃炉廃棄物の処理につなげようとしている。これは国民全体の安全の根幹に関わる。しかし、同時にこれまで原発エネルギーという麻薬に浸ってきた国民の責任もまた問われることになろう。福島の人々の犠牲は私たちの未来を顕在化したのである。この重い問題にどう対処するかも脱原発時代の課題である。しかし諦めずに取り組むしかない。(河田)